

第二十九回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

鎌倉幕府と宗教

高橋典幸

日本史学を専門に研究しております。鎌倉幕府を勉強しておりますので、日蓮聖人の名前を聞くこともありますけれども、実は私が専門にしておりますのは鎌倉幕府の御家人制とか荘園制でして、どちらかというと斬った張ったの世界のことを研究しております。宗教とか仏教とは、非常に縁遠いところがございます。今日は、しかも、ご専門の蓑輪先生、中尾先生もいらっしゃいますので、思い切って私の専門の鎌倉幕府の話を見せていただきたいと思っております。もちろん、全然関係ない話をするわけにはいきませんので、鎌倉幕府と宗教の関係、この場合、宗教といっても仏教となりますけども、政治権力が仏教とどういう関係を持ったのかということ、簡単にお話しさせていただきます。だいたいと思っております。

まず「鎌倉幕府とは？」ということですが、皆さんよくご存じのように、十二世紀の末に、源平合戦、日本史の世界では「治承・寿永の内乱」という言い方をよくしますけれども、こうした大きな戦争を経て、鎌倉を拠点に成立した新しい政治権力ということになります。もちろん、それまでも朝廷という政治権力がありました。朝廷とは異なり、武士が中心になった武家政権、そういった意味で、新しい政治権力であるということは間違いないだろうと思います。私自身も、鎌倉幕府が成立したことが、日本史上、非常に大きな出来事だ、画期的な出来事だと考えて

いるのですけれども、逆に、鎌倉幕府が新しい権力、新しい政治権力だということを強調するあまりに、それまでの朝廷と全く違う、全く性格の異なる政治権力が登場したのだと、ここまで言ってしまうと、どうかなの感じがするところがあります。

かつては、もう五十年ぐらい前かと思いますが、朝廷を構成した貴族たちと、鎌倉幕府、これは武家政権でありますので、武士を中心としています。貴族と武士というのは全く違う存在なのだと、両者の違いが強調される傾向にありました。そもそも武士というのは、貴族がいた都ではなくて、辺境地帯、東国の農村から自然発生してきました。そのような出自といえますか、出身からして、全く朝廷とか貴族とは違うんだというふうに考えられていたわけです。違うからこそ、新しく登場した武士が、どんどん都の貴族や朝廷を圧倒していくという形で、鎌倉時代の歴史が語られることが多かったのです。

ところが、近年の研究では、そういった考え方がだいぶ改められてきまして、むしろ武士の発生そのものも、考え直した方がいいだろう、東国の農村から自然発生したと考えられていたわけですが、むしろ近年は、武士も京都の貴族社会の中から生まれてきたのだと考えられています。これは、ご説明しだすと長くなりまして、きちんとご説明しようと思うと、今日の夕方四時ぐらいまでかかってしまいますので、簡単に言いますと、貴族社会と密接な関係を取りながら登場し、成長していった存在が武士であって、ある意味、貴族社会の一員と考えてもいいのではないかと考えるようになってきております。

鎌倉幕府を構成したのは、最終的に武士の中でも東国を本拠地とする武士でありますので、貴族社会と関係を持ちながら登場してきたとはいえ、東国の方に拠点を持っていってしまうわけでありませうけれども、東国に拠点を持っていたあとも、全く京都や朝廷と無関係ではなくて、むしろ平安時代の武士でも、京都と本拠地の東国をしょっちゅう行ったり来たりしたことが明らかになっている。単に京都に来るだけじゃなくて、京都の朝廷とか貴族社会と密接な

関係を結んで過ごしていたということが、だんだんと明らかになってきたわけであります。

さらに、鎌倉幕府を最初にまとめた初代將軍の源頼朝。これも皆さんもご存じと思いますが、清和源氏、最近は「河内源氏」という言い方をしたりしますけれども、河内源氏の棟梁の家柄であり、武士の中でもエリートの家柄です。頼朝というところでも、鎌倉幕府の初代將軍であるので、東国武士の代表という感じがするのですが、よくよく考えていきますと、頼朝というのは、ちょっと俗な言い方をすると京都人なのです。別にいけずな京都人という意味ではなくて、京都出身なのです。京都で生まれ育って、京都で成長していた。

武士とはいえ、河内源氏・清和源氏というのはエリートでありまして、まさに貴族社会の一員という側面も持っておりまして、頼朝も十二歳で元服しますと、実は京都の貴族社会、朝廷で位と官職をもらって、朝廷の儀式に参加しているのです。歴史に「もし」という言い方は禁句ではありますが、平治の乱で頼朝は伊豆に流されてしまいうすけれども、もしそれがなければ、かつうまく出世していれば、むしろ平清盛のような生き方を歩んだのではないだろうか。すなわち、貴族社会の中で、貴族社会の一員としての武士として出世していった、存在感を高めていった、そのような生き方をしたのではないだろうかと考えられるわけであります。

そのため、鎌倉幕府の新しさというのは、頼朝に即して言いますと、そもそも河内源氏・清和源氏の家柄として、貴族社会の中の武士として生きていく生き方、これをやめて、新しく東国で生きていこうとした、こうした生き方の選択を自ら行ったという点に頼朝の新しさがあり、そこに、頼朝によって創始された鎌倉幕府の新しさを認めるべきだろうと思うわけであります。

ですので、鎌倉幕府というのは、新しい政治権力ではあり、政治的な立場としてはそれまでの朝廷とは異なりますが、頼朝をはじめとする歴代の將軍たちや、その周辺に集まってきた武士・御家人たちは、多くの面で朝廷や貴族社会と、例えば価値観や、趣向を共有する側面も、少なからずあったわけであります。難しい話になりますけれども、

中世には「荘園」というものがありまして、貴族の持ち物、財産というイメージがありますが、実は將軍も荘園を持っているのです。そういう点で共有しているのです。今日のテーマ、宗教、仏教という点に関しても、やはり鎌倉幕府は、先行する朝廷や貴族社会と共有している面が非常に強いのではないかと思うわけでありまして。

では、鎌倉幕府へ行く前に、当時の朝廷・貴族社会の宗教、仏教はどのようなものだろうか。これは、それぞれ専門の先生が今日はいらっしゃいますので、非常に簡単に、ごくごく簡単にかいつまんで申し上げますと、鎌倉時代の朝廷・貴族社会の仏教といいますが、中心は平安時代以来の、少し難しい言葉を使いますが、顕密仏教が中心だったのだろうと思います。具体的に言いますと、奈良の南都六宗、天台宗、真言宗。これを中心とする顕密仏教が、鎌倉時代、中世の朝廷・貴族社会の仏教の中心であったことは、間違いないだろうと思うわけでありまして。

これは教科書の書き方にもよるのですが、教科書を読んでいきますと、鎌倉時代の文化・宗教のところに行きますと、鎌倉新仏教を大きく取り上げます。まさに日蓮聖人の日蓮宗がありますし、法然や親鸞の浄土宗・浄土真宗もありますけれども、確かにそれも大事なのですが、あくまでも当時の実態に即していきますと、鎌倉新仏教というのはあくまでも新興勢力でありまして、決して鎌倉新仏教が、社会全般とか、更には朝廷の全体を覆うような、そこまでの影響力はなかったであろう。そもそも「〇〇宗、△△宗」という言い方が定着していくのはもつと時代を下ってきますので、やはり顕密仏教が中心だろうと思うわけでありまして。

ただ、個人の問題は別です。朝廷・貴族社会、主に朝廷といったような政権の問題としては顕密仏教ですが、個人のレベルになっていきますと、やはり新仏教が一定の影響を持っております。先ほど、近衛家という貴族社会のトップの話を袁輪先生がされましたけども、近衛家と並ぶぐらいの朝廷・貴族社会のトップに九条家という家があります。その鎌倉時代初めの当主に、九条兼実という人がいます。この人は朝廷・貴族社会のトップですので、仕事の面では顕密仏教を大事にするわけでありまして、うちへ帰ると法然の非常に熱心な信者であったということも知ら

れております。ですので、個人の問題と切り離して考えなくてはいけないのですが、やはり仏教界の主流、特に朝廷といった問題を考えていく場合には、平安時代来の顕密仏教が中心だったということになります。

もう少し申し上げますと、顕密仏教の特徴としましては、お坊さんの位や官職があるのです。朝廷からお坊さんの位や官職をもらって、さらに朝廷の要請に応じて、もしくは貴族社会の要請に応じて、祈禱を行う。個人的な祈禱もありませんし、朝廷全体、国家全体の祈禱も行う。これが、顕密仏教の非常に大きな特徴であると思います。代表的な寺院をあげると、南都六宗の場合は有名な東大寺や興福寺、さらに、天台宗や真言宗の場合は延暦寺や園城寺、仁和寺や東寺。天台宗の場合は、延暦寺を「山門」、園城寺を「寺門」と言い、天台宗は二系統あったわけです。また、真言宗の場合にはいろんなお寺がありますし、いろんな流派もありますが、全体をまとめて「東密」という言い方もします。こうした山門・寺門・東密が、顕密仏教の中心であります。

これが鎌倉時代の始まる頃の朝廷と仏教の関係の大きな枠になってくるわけですが、では鎌倉幕府はどうであったかといいますと、ほぼこれをそっくり受け入れていくことになります。もう少し具体的なお話がしたいと思ひまして、どうしようかなと考えていたのですが、そうした鎌倉幕府と仏教の関係を考える場合に、鎌倉の地図が、鎌倉幕府と仏教の非常にいい縮図になっている。そこで鎌倉の地図を見ながら、鎌倉幕府



と仏教の関係をお話ししていきたいと思えます。

まず鎌倉幕府と仏教の関係、鎌倉幕府の仏教政策を考える場合に重要なのは、三つのお寺と神社になります。一つが、鶴岡八幡宮。非常に有名な神社ですので、皆さんもご存じだと思いますけども、地図では四角で名前を囲っています。鎌倉の南側は海に面しています、残り三方を山に囲まれているわけですが、どんつきの所にある神社、鶴岡八幡宮。これが一つです。

二つ目、三つ目はあまり知られていないので、ここで少し強調しておきたいのですが、二つ目は、勝長寿院というお寺です。どこかといえますと、やはり地図で名前を四角で囲った所です。ちなみに、鶴岡八幡宮のすぐ右隣、東側に、大倉御所といっています、頼朝が住んでいた御所があるわけですが、勝長寿院は、大倉御所からみるとすぐ南になります。これが二番目。三番目が、永福寺（ようふくじ）というお寺でありまして、これもまた地図では名前を四角で囲っています。これは、大倉御所からみますと、北東、まさに鬼門の方角に当たります。この三つの寺院・神社が、鎌倉幕府の仏教政策、宗教政策を考える場合に、非常に重要な役割を果たしています。

それぞれ見ていきますと、鶴岡八幡宮は、現在でも鎌倉の町の中心であります。若宮大路という道路は鎌倉のメインストリートになっておりますけれども、これは今でもそうですし、昔もそうでしたように、鶴岡八幡宮の参道です。鶴岡八幡宮の参道を中心に、鎌倉の町は発展してきたと言えることもできるわけがあります。

大事なのは、今でこそ鶴岡八幡宮、神社としてありますけれども、実は江戸時代以前は「鶴岡八幡宮寺」とも言いました、神社とお寺両方の性格を備えております。神仏習合ですね。神仏習合にはいろいろな在り方がありますが、鶴岡八幡宮寺の場合は、もちろん神主さんもおりますが、中世にはお坊さんもいまして、むしろお坊さんの方が主導権を握っている。そういった神社、お寺だったわけです。中でも鶴岡八幡宮のトップは、別当と呼ばれるお坊さんだったわけですが、これは鎌倉幕府によって任命されていた。まさに鎌倉幕府の公的な寺院・神社だった

のであります。

では、どういう人が鶴岡八幡宮寺のトップ、別当に任命されていたかといえますと、歴代がずっと分かるわけですが、鎌倉時代の別当は、いずれも、先ほど申し上げました寺門、天台宗の中でも園城寺系の寺門のお坊さん。もしくは東密のお坊さん、真言宗ですね。このお坊さんたちで、ずっと別当が任命されていた。幕府は、寺門と東密を鶴岡八幡宮のトップに据えていたということになります。

さらにこの別当の下に、「供僧（くそう）」、「ぐそう」とも言いますが、鶴岡八幡宮の場合、二十五人の専門のお坊さんが任命されていたわけです。この二十五人の供僧は、どういう構成をしていたかといえますと、これもまた別当と同じでありまして、別当が寺門系のお坊さんか、東密系のお坊さんかによって、二十五人のバランスは微妙に変わりますけれども、大きく言えば、寺門のお坊さん、東密のお坊さんによって占められていたということが分かっています。

こうした、まさに顕密を代表する寺門と東密のお坊さんによって鶴岡八幡宮寺は構成され、幕府の命令を受けて、幕府のために祈祷を行うことを求められていた、期待されていた。そういったお寺だったわけがあります。

続きまして、先ほど二番目にご紹介しました、勝長寿院を見ていきたいと思います。場所は御所の南側になりました、室町時代には廃絶してしまって、現在はほとんど痕跡をとどめておりません。住宅街になってしまっていますので、よく分からないところもありますけれども、相当大規模な寺院だったらしい。元々は、頼朝が幕府を開いたときに、お父さんの菩提を弔うために作ったお寺。そういった意味で言いますと、源氏將軍の菩提寺のような性格のお寺だったわけでありまして。ところが、源氏將軍、ご存じのように頼朝、頼家、実朝、三代で断絶してしまいますけれども、断絶してしまつたあとは、先ほどの鶴岡八幡宮寺と同じように、幕府の公的なお寺、官寺としての性格を強めていきます。

こちらの勝長寿院の方の別当はどうなっていたかといいますと、鶴岡八幡宮寺と非常に対照的です。先ほど鶴岡八幡宮寺が寺門系と東密系と申し上げましたけども、こちらの別当は、山門系です。天台宗の中でも、園城寺ではないもう一派の方です。かつては鶴岡八幡宮寺だけが注目されておりまして、鎌倉幕府というのは、顕密仏教の中でも東密と寺門だけ。比叡山延暦寺を代表とする山門は、排除していたといわれていたのです。それが、最近、勝長寿院の研究が進んだ結果、実は勝長寿院は山門のお坊さんが占めていた。幕府は結局、顕密仏教、山門も寺門も東密も全部まとめて奉仕させていたということが、明らかになってきたのです。

もう一つ、永福寺でございます。こちらも勝長寿院と同じように、室町時代に廃絶してしまいました。現在は何も残っていません。どういうお寺かといいますと、頼朝が奥州平泉の奥州藤原氏を滅ぼしたあとに、奥州合戦で死んだ人を供養するために作ったお寺といわれております。先ほど申し上げましたように室町時代に廃絶してしまっているのですが、幸い、非常に遺構の残りが良いのです。発掘調査が進みまして、京都の宇治に平等院というお寺がありますが、平等院に匹敵するような大寺院があったことがわかってきました。あの狭い鎌倉に、よくこんなお寺があったなという感じがしますけれども、こちらも顕密系のお坊さんが別当を務めていたということが分かっております。

以上、鎌倉を代表する鶴岡八幡宮寺、勝長寿院、永福寺をご紹介してまいりましたが、いずれも顕密のお坊さんたちによって担われており、顕密の修法で鎌倉幕府を宗教的に護持することが求められていた。これは、鎌倉時代、一貫して変わらない。顕密の寺院が幕府の宗教政策の中心だったことは、間違いないところであります。

ただし時代が経過していきますと、鎌倉幕府と仏教の関係にも、新しい要素が付け加わってきます。端的に言いますと、これまでの山門・寺門・東密の顕密に加えて、禅宗と律宗という要素が加わってくるわけです。これもまた地道で確認しておきたいのですけれども、楳田で囲った名前、皆さんよくご存じだと思えますが、北鎌倉の建長寺。また、同じく北鎌倉の円覚寺。これが、鎌倉の禅宗を代表する二大寺院です。そしてもう一つ、律宗。現代の感覚から

するとピンとこないところもありますけれども、鎌倉時代には律宗も非常に盛んであったわけですが、鎌倉の律宗を代表する寺院が、今度は海の側、建長寺・円覚寺の山の側に対して、非常に対照的なわけですけれども、海の側にあった極楽寺です。この三つの寺院が、鎌倉の禅宗と律宗をよく象徴していると思われれます。

まず禅宗の方から見ていきたいと思えます。禅宗と鎌倉幕府の関係は意外に早く、臨済宗の開祖の栄西という方が十三世紀の初めに鎌倉にやってきて、將軍に仕えたり、寿福寺の住職になったりしたということも知られているのですが、本格的な関係は、もう少し下りまして、十三世紀半ばになります。鎌倉幕府で言いますと、有名な北条時頼という方が執権をしていた時期です。北条時頼は、寛元四（一二四六）年に執権に就任するわけですけれども、たまたま同じ年、これは単なる偶然ですけれども、蘭溪道隆という中国の禅宗、臨済宗のお坊さんが、九州にやってくる。このあと北条時頼は蘭溪さんに非常に帰依しまして、ぜひ鎌倉に来てほしい。そして、鎌倉に建長寺という新しいお寺を時頼が作ると、今度はぜひそこで住持をやってほしい。これが、建長五年（一二五三）になります。鎌倉における禅宗の発展・興隆というのは、北条時頼が建長寺を開創して、蘭溪を据えた。これが非常に大きなきっかけになっているわけです。

以後、鎌倉には続々と、中国出身のお坊さんが招聘されて、建長寺の住持になる。さらに、時頼の息子、モンゴル襲来の時に執権をやっていた北条時宗も、お父さんに倣って円覚寺を造りますが、円覚寺や建長寺の住持に続々と中国のお坊さんを招いてくることになるわけです。そして、そうしたお坊さんたちが、そこで新しく弟子を育成するとともに、幕府の要請に応じて祈祷を行ったりしていたということになるわけでありませう。

一点北条時宗の手紙をご紹介します。詮蔵主、英典座といった二人のお坊さんに対して、中国に行つて、中国の優れた禅僧を日本にお招きしなさい、招聘してきなさいということを書いている手紙なのです（円覚寺文書）。これ、弘安元年（一二七八）という年号がついておりますけれども、ちょうどこの年の七月に蘭溪道隆が死んでしま

ったのです。蘭溪に代わる指導者を求めたいということで、中国に行つて連れてきなさいということ。それぐらゐ中国の禪宗のお坊さんに時宗も時頼も心酔していたということが分かりますし、注目されるのは、弘安元年という年です。西暦で言いますと一二七八年のことなのですが、これはどういう年かというところ、文永の役と弘安の役のちょうど戦間期。モンゴルと戦争している最中にもかかわらず、中国に行つてお坊さん連れてきてほしい。それぐらゐ熱心に、中国の禪宗のお坊さん連れてこようとしていることが分かるわけがあります。

禅宗というのは、鎌倉幕府が帰依したこともありまして、このあと、全国に広がっていきます。教科書でも、禅宗の雰囲気は武士の志向に合っていたことが書かれているわけですが、鎌倉に則して見るならば、特に北条時頼・時宗親子の志向が強かったのではないかと感じます。

では、律宗の方はどうか。律宗というのは、禅宗とはちょっと様子が違うのですが、十三世紀の前半、専ら奈良のお寺、南都六宗の中でも、例えば西大寺とか、唐招提寺といったお寺を中心に、お坊さんが守らなくてはいけない戒律を、一生懸命復興していこう。そういう運動を起こした一派だとお考えください。

律宗はそういった形でしたので、元々は奈良や京都に活動の中心があつたのですが、十三世紀半ば、これもさきほどの北条時頼の時代とびつたり重なるわけですけども、十三世紀半ばになって、関東地方、更には鎌倉に教勢を拡大していったわけでありまして。北条氏の一族の中に金沢氏という一族がいるのですが、これが熱心な律宗の信者だったこともあつて鎌倉に引つ張つてきたのだらうと考えられておりまして、弘長元年、一二六一年に、忍性というお坊さんが、まず鎌倉に入ってきます。翌年、忍性のお師匠さんに当たる叡尊という方を鎌倉に呼んできます。すると、鎌倉の人々は喜んで集まってくる。さらに文永四年（一二六七）になりますと、先ほどご紹介した極楽寺というお寺に、忍性が拠点をおくようになってくるわけでありまして。

その極楽寺。律宗のお坊さんの活動として特徴的なのは、もちろん宗教的な実践もそうなのですが、病気の人の救

済とか、道路や橋の修理、今風に言うところの公共事業ですが、これを熱心に行ったということが知られておりまして、極楽寺の中にも病院があったことが知られています。面白いのは、公共事業に熱心ということでありまして、今風に言うならば、自治体がやらなくてはいけない。誰もが使うものですけれども、誰のものでもありませんので、やっぱり行政がやらなくてはいけないわけですが、中世の行政は、そこは無力です。必要だと思いつながらできないのですが、ある意味、幕府がやらなくてはいけないことを、代わりに律宗がやってくれるということでありますので、幕府にとっても非常に都合がいい面があったわけです。

その点、興味深いのは、地図を見てもらいますと、極楽寺から見て真東、鎌倉の東の端の方に、和賀江島という小さな島がある。これは何かといますと、人工島です。人の手で石を積み上げて作った島。中世の港、港湾施設です。今も一部痕跡が残っておりまして、石が積み残されている様子が、干潮時だと見えるのです。これを幕府は整備していたわけですが、こういう状況であるため、メンテナンスが必要でした。しかし、幕府は「やりたくない」。そこで、律宗、極楽寺が管理するようになったわけです。律宗のお坊さん、律僧たちは、このような公共事業を代替してくれるという点でも、幕府にとっては便利な存在であったことが分かるわけであります。

日蓮聖人が鎌倉で活動を始めたというのは、まさに北条時宗の時代でありまして、鎌倉幕府は、従来の顕密に加え、律宗や禅宗とも関係を持ち始めている。そういった時期です。そのようなときに有名な四箇格言というのをあらためて振り返ってみますと、ちょうどまさに鎌倉幕府の宗教政策と、びつたり対応していると感じます。すなわち、「真言」というのは、まさに鎌倉幕府の宗教政策のベースにあった顕密仏教のことでありまして、「禅」は禅宗、「律」は律宗でございます。

もう一つ、では、「念仏」はどうなのだろうか。念仏も鎌倉幕府の宗教政策にガチッとハマっているかというところ、これは少し違うようです。念仏に関しましては、幾つか鎌倉幕府は法令を出しているのですが、代表的な文暦二（一

二三五年の法令を見ると、念仏者のうちで道心堅固の者はお構いなし、問題ないけれども、どうも念仏者というのはかくかくしかじかの不行跡があり、そのような念仏者はけしからんで、鎌倉を追放してしまおうと。こういった法律を出しているわけです。

ただ、これもまた先ほど申し上げましたように、幕府の法令とか政策と個人の信仰の問題は、別になってきます。鎌倉幕府の御家人や、北条氏の一族の中には、熱心な念仏の信者もいたわけであります。そういった意味で言いますと、幕府の政策と、御家人とか武士個々の信仰というのは、密接な関係があるようであり、少し違うところもあり、非常に複雑で、一筋縄ではいかないと感じます。

鎌倉幕府と仏教、主に仏教政策の問題について、全体的な様子を概観させていただいたということになります。どうもご清聴ありがとうございました。